高校編㉛ 最新事情

地域の大きな協力が生徒の成長と気付きを促す

愛知県立豊丘高等学校

（愛知県豊橋市）

愛知県立豊丘高等学校は昭和38年に地元からの強い要望により誕生した。同校では地域に貢献できる人材育成を掲げ、さまざまな教育活動を実施している。今回は生活文化科に焦点を当て、秘書検定の取り組みなどを中心にお話を伺った。

愛知県立豊丘高等学校。同校は住宅街の中にあるが，緑豊かで広大な敷地が自慢。窓に目をやれば雄大な湖西連峰を望むことができる

梅藤仁志校長。「地元を含め，広く社会で活躍する人材を育てたい」と意欲的だ

地元の要望で誕生して半世紀 生徒の夢の実現を目指す

愛知県立豊丘（ゆたかがおか）高等学校には普通科と生活文化科があり、合わせて約960名の生徒が学業と部活動に励んでいる。梅藤（ばいとう）仁志校長は開校の経緯を次のように話す。

「当校は高度経済成長期真っただ中の昭和38年に開校しました。当時は戦後に生まれた子どもたちが高校に入学する年齢となり、進学希望者が増えた時代。地元は県立高校の開設を強く望みました。その要望に応え、次世代を担う人材育成を目指す高等学校として普通科と現在の生活文化科である家政科の併置校を開校したのです。これまで約2万人近い卒業生を送り出し、一昨年に創立50周年を迎えることができました」。

開校から半世紀。同校の卒業生は地元定着率が高く、役所や企業などのさまざまな職場で活躍している。「地域の強い要望によって開校したからこそ、地元を支え、地元の発展に貢献できる人材を送り出していきたい」と意気込む梅藤校長だが、願いはそれだけにとどまらない。

「全員が地元に残るわけではありません。自分の夢を実現させるため、県外や都心部へ就職、進学を希望する者もいます。それでよいのです。それぞれが目標とする将来にふさわしい進学先を選び、勉学に励んでほしいと思います。生徒一人一人の夢を実現できるように指導することこそ、私たち教職員の大きな使命だと考えています」。

生徒の夢を実現するために普通科、生活文化科ともに多彩な活動に取り組んでいる。特に生活文化科の活動は多岐にわたり、各種検定の取得やプロによる講習会の実施、卒業発表会に向けて作品制作などを実施している。

生活文化科は一学年約80名で、全員が女子生徒の学科だ。2年次からコース選択制を採用しており、三つのコースがある。保育・看護・福祉・被服・調理を幅広く学ぶ「ライフコース」、ファッション・デザインの専門的な学習が中心の「ファッションコース」、そして調理・栄養を中心に学習する「フードコース」。どのコースでも将来スペシャリストとして活躍できる力を身に付けることを大きな目標としている。

生活文化科主任の峯田絵美子先生と同科の市原恵子先生(右)
「当校の生徒は部活動も積極的に行っています。夏休みでも毎日，にぎやかです」と峯田先生

コース制の意義について生活文化科主任の峯田絵美子先生はこう話す。

「2年次からのコース制は平成25年度の入学者からスタートした新カリキュラムです。それまでは3年次からだったのですが、1年早めたことで、各コースにおいて専門的な技術や知識をより深めることができるようになりました。早い段階で専門的な学習ができれば、生徒は自分自身の適性を見つけ、興味・関心のある分野の可能性を広げることが可能になります」。

生活文化科1年生の科目「生活産業基礎」でインターンシップを経験する生徒たち。衣食住・サービスなどに関する職業を調べたり，インターンシップに参加することで，職業への意識を深めることが大きな狙いだ

学校だけではなく地域全体で生徒を育てる

2年次からのコース選択に欠かせないのが1年次の科目「生活産業基礎」だ。衣食住やサービスに関する職業調べ、インターンシップを通して、多種多様な職業についての意識を深める授業を展開している。同科の市原恵子先生は狙いをこう話す。

「この科目の狙いはどのような職業があり、どのような仕事内容なのかを知ることです。テキストや調べ学習だけではなく、インターンシップを通して実際の仕事を体験し、さまざまな気付きを得ます。憧れが打ち砕かれることもあるでしょうし、大変さを理解しつつそれでも目指したいと思う生徒もいるでしょう。感じ方は一人一人違いますが、1年生のうちにこうした経験をすることに大きな意義があります」。

市原先生の言葉通り、生徒たちは教室では学べない多くの気付きを得るようだ。「特にインターンシップ先で指摘されるのは、返事がない、あいさつの声が小さいということ。生徒は叱られることでコミュニケーション能力と協調性のなさなど、社会に求められているものが足りないことに気が付きます。注意されたことが本人の心に残っていれば、その後、足りない部分を補おうと思えるはずです」と話す峯田先生。さらに「インターンシップには地元の協力が欠かせない」と続ける。

「叱っていただける方が地域にいることは大変重要なことです。インターンシップは今年で3年目になりますが、当校の教育理念を理解していただき、インターンシップにご協力くださる企業や事業所が年々、増えています。地域の方たちに当校の生徒を教育していただける貴重な機会です。生徒にはこのチャンスを生かして、ステップアップしてほしいです」と峯田先生は願いを込める。

1年次の取り組みはこれだけに限らない。知識だけではなく、技術的にも確かなものを習得して卒業することを目標とする同科では、1年次から各種検定の取得に積極的に挑戦している。昨年度、1年生から3年生までが挑戦した資格は七つ。「秘書検定」もその一つだ。

同校では十数年前から秘書検定を導入しており、鈴木洋子教頭は次のように評価する。

「社会で求められ、活躍できる人材になるためには、専門知識や技術はもちろん、人間性を磨く必要があります。そのためにはTPOを意識した立ち居振る舞いやコミュニケーション能力、そして正しい言葉遣いを身に付けなければなりません。少し前までの日本であれば、言葉遣いや立ち居振る舞いを家庭で教えることが可能でしたが、現在の家庭環境では難しくなりました。社会で必要とされるマナーや作法を学

最新事情 31……愛知県立豊丘高等学校

び、実践的な力を身に付けるために秘書検定の内容は大いに役立ちます」。

秘書検定と講習会で実践力を鍛える

同科では2、3年生全員が専門科目「生活文化」で秘書検定に挑戦している。2年生は11月に実施される3級の試験に向けて勉強をスタートする。3年生は2年次で約9割の生徒が3級に合格しており、卒業までに2級取得を目指して課題や過去問題などに取り組んでいる。

「秘書検定に合格した3年生は、合格できたことを本当に喜んでいます。それは秘書検定が社会で認められているものであり、学んだ分だけしっかりと知識や教養が身に付いていることを実感できるからです。彼女たちのうれしそうな顔を見ていると、高校生のうちにこうしたチャレンジをすることの意義を深く感じます」と峯田先生は目を細める。

実際に秘書検定に挑戦した生徒に話を聞いてみた。3年生の鈴木ひなのさんは昨年2月に3級に、今年6月に2級に合格した。

「特に難しかったのが2級の問題です。3級はそこまで苦労しませんでしたが、2級は問題の設定がより複雑になり、答えに迷うことが多くなりました。そこで活用したのが過去問題です。問題を幾つも解いて、間違えた問題はすぐに解答と解説を確認し、場面をイメージしながら納得するまで繰り返し読みました。おかげで2級の内容に慣れ、自信を持って本番に挑めました」と笑顔の鈴木さん。「検定で学んだ立ち居振る舞いを、大学入試の面接試験で役立てたい」と意気込みも聞かせてくれた。

同科では秘書検定の学びを深めるため、外部講師による講習会も実施している。今年7月に2、3年生各一回の「接遇マナー講習会」が行われた。

講習会では秘書検定の内容に沿って、お辞儀や正しい姿勢、言葉遣いなどを中心に実践形式の授業が1時間展開された。

「これから秘書検定を受験する2年生は、講習会で学んだことが理解できていないと合格できないと気付きます。一方、3年生は秘書検定で学んだ名刺交換やお辞儀の仕方の必要性を実感できます。検定指導と講習会の内容をつなげることで、高い実践力を養うことが可能です」(峯田先生)。

外部講習会は「接遇マナー講習会」の他にもデザイン画やファッション画、看護、福祉、シュガークラフト、保育、洋菓子などの分野で開催されている。講師はその分野で専門技能を持ち実際に地元で活躍するプロが務めている。梅藤校長は講習会について「地域が大きな支えとなっています。今後も多くの方に、充実した実践指導をお願いしたい」と話す。

峯田先生は「どの講習会でも生徒は大きく成長します。専門教育を得意とする講師の指導は、短時間で効果を出すことができます。地元で活躍するプロの方から学べることは生徒にとって新たな発見であり、喜びです」と大きな効果を実感しているようだ。

同科の取り組みは地元の支えなくしては実現できない学びばかりである。さまざまな活動を通して学びを深める生徒たち。恩返しの思いを胸に卒業後、社会に大きく羽ばたいて行くに違いない。

生活文化科3年生の鈴木ひなのさん。昨年2月に秘書検定3級に，今年6月には2級に合格した。「将来の目標は家庭科の教員になることです」と笑顔で語る

今年7月に実施された「接遇マナー講習会」。愛知大学短期大学部の瀧﨑優佳氏が外部講師として登場。生徒たちはお辞儀の仕方や立ち居振る舞いを学んだ